

令和 7 年 第 2 回大河原町教育委員会定例会会議録

- 1 招集日時 令和 7 年 2 月 7 日（金） 午後 4 時 00 分
- 2 招集場所 大河原町役場 2 階 第 1 会議室
- 3 出席委員 一盃森広志委員、丹羽宜博委員、林恵美子委員、片倉亜寿香委員、
鈴木洋教育長
- 4 説明のため出席した者
櫻田尚 教育総務課長、齋修 生涯学習課長、小野寺淳一 学校教育専門監
- 5 開 会 午後 4 時 00 分
- 6 令和 7 年第 1 回教育委員会定例会会議録の承認について
鈴木教育長 | （委員全員に諮って）承認する。
林委員、片倉委員 署名。
- 7 教育長報告
（1）一般事務報告 なし
（2）専決事務報告
報告第 1 号 専決処分の報告について
（令和 6 年度大河原町一般会計補正予算（第 9 号））
報告第 2 号 大河原町学力向上指導のための任期付き教職員の採用等に関する条例の一
部改正について
教育総務課長より説明。
- 8 議 事 （非公開）
議案第 2 号 県費負担教職員の異動等の内申について
鈴木教育長より説明。
鈴木教育長 | （委員全員に諮って）可決する。

9 その他

(1) 教育長報告

1 『みんなの「今」を幸せにする学校』(遠藤洋路)

教育基本法の目的は、「人格の完成」であるが、それができる人間はいないと捉えている。人生や社会の最終目標は、「幸福」＝ウェルビーイングである。

学校の仕事を減らすのではなく、人と予算をつけ、教職員ひと一人ひとりの仕事を減らすことが必要。

2 『教職研修』から

(1) 求められる多様な「学び」に学校はどう向け合えばよいのか(石井英真)

授業や学びは子どもと教師の二項で捉えるのではなく、材を介した三角形の構造で捉えることが重要である。どれだけ「〇〇な学び」が示されようが、授業づくりにおいては、いかに子どもたちを材と出会わせて、没入させて、さらにその先にもっと欲しい、学びたいと思わせるかが勝負で、本当に基本的なことだと思う。

(2) いじめの「重大事態」に備え、トラブルの「重大事態扱い」にも備える(滝允)

重大事態調査は、処罰感情に応えることではないこと、トラブルの際には、被害・加害と決めつけることなく、双方から丁寧に聞き取りを行うこと、双方のよりよい成長・発達のために指導やケアを行うこと、双方の保護者にも、そうした対応への理解と協力をお願いすることなどを保護者に繰り返し説明しておくことが必要。

(3) 先生たちのメンタルケアが大切だと思う理由(七條貴子)

子どもの不登校で悩んだ保護者の意見。「いつでも待ってるよ」と手書きのメモを渡してくれた小1のときの担任の先生。メッセージのおかげで完全には学校から心が離れなかった。先生のおかげだというようなことが書いてある。やはり、先生の力は大きいのだと思う。

3 『学力喪失』(今井むつみ)

「分からない子」が、どこでつまづくのかが認知科学の視点から、具体的に述べられていて納得させられる。教員必読の書である。

学力は知識の量ではなく、「自ら学ぶ力」であり、丸暗記の「死んだ知識」ではなく、様々な場面で使いこなせる「生きた知識」の体系づくりが重要と説く。

4 算数科の授業(算数授業研究No.153.154)

(1) 「判断すること・判断した理由」を授業の中心に据える(大野桂)

(2) 問い返し発問の活用(盛山隆雄)

- (3) 既習事項や経験に近づけ未習との境目を明らかにする(田中英海)
- (4) ペア対話の方法と内容をしぼる(盛山隆雄)
- (5) ペアでの表現活用や自由な意見交流(盛山隆雄)
- (6) 「別の部分で考えられる」(田中英海)
- (7) 算数の授業が上手な先生は全国どこにもいらっしゃる(笠井健一)
- (8) 子供が数学的な見方・考え方を働かせるために教師ができる7つのポイント
(笠井健一)

算数科の授業で筑波大附属小学校の先生方が、それぞれの論説を書いています。
小学校の先生、中学校の数学の先生だったら、こういうところを意識して授業づくりをしてほしいと思う。

5 指導と評価

- (1) 「指導の改善に生かす評価」とは何か(北俊夫)
- (2) 確かな評価は授業の羅針盤である(『授業の創造』北尾倫彦)
- (3) 国語科における学習評価の改善と指導の充実(菊池英慈)
- (4) 算数科における学習評価の改善と指導の充実(笠井健一)

「思考・判断・表現」については、授業中の問題発見や解決の過程において子供が発揮するものであるので、授業中の発言や話し合いなどの活動の様子と、個人解決時の問題解決の様子、適用問題や活用問題の解決の様子や学習感想などの振り返りといったノート等の記述内容から評価の情報を収集することが望ましい。

6 タブレット端末の活用とその成果

小学校での活用割合は全国値に比べてやや低い。活用頻度を上げる必要がある。例えば、1日の授業で最低1教科は、「振り返りシート」や「授業感想」をタブレットを使うことでよい。子どもの状況把握が容易になり、教師も評価しやすくなる。紙ベースの振り返りシートを写真で撮らせ教師に送るようにすることでも良い。

7 その他

各種事業、研修会、会議、授業の様子等について資料により説明。

丹 羽 委 員	今朝のNHKで味噌のPRをやっていた。大河原をどんどん宣伝していただいてありがたい。
片 倉 委 員	NHKで放送の金ヶ瀬小学校のマインクラフトは何年生がやっていましたか。
小野寺専門監	6年生がやっています。

片 倉 委 員	私の子が見ていて、すごく羨ましがっていた。大河原小でもやらないのか。
小野寺専門監	県の方から直接照会があったものである。
丹 羽 委 員	P14の「学校に行くなら自殺する」という実際の話だと思うが、小学生がこんなこと言いますかね。ものすごく大人だと思う。もしくは賢いか。 それから遠藤先生の話。幸福・平等ということに触れていますが、普通ならば、知・徳・体である。徳を最初に持ってこられる意味はあるのでしょうか。
鈴木教育長	やはり、心の教育が重要なんでしょうね。
丹 羽 委 員	いじめの話。やはり見方によって変わる。子どもの目線と大人の目線で全然違う。自分の今までの経験とか知識とかで物事を見てしまうので、もしかすると、平等も一方的な平等になりかねない。幸せも一方的な幸せになりかねないということをやっぱり知っておくべきですね。 やはり一番の教育で大事なことは、子供に寄り添う、寄り添う心、柔軟な心、そういったものがとても大事なんだろうみたいな感じで、いじめトラブルのことを読みました。
一 盃 森 委 員	個別化、個性化っていうふうなことが言われてたのは、遡れば、35年40年も、昔の話。私が白石第2小学校にいた時に言われていたんですよ。算数科でパソコンを使って授業をするのが初めてだったんですね。 パソコンなので、教育工学の手法を使って、何とかその個別化に対応できないかっていうふうな考え方で、教育工学だからフローチャートってあるじゃないですか。課題があって、イエスの場合は次にどういうふうな指導すればいいか、ノーの子がいたときは、こういうふうなところを経由して、それがイエスになるようにして、指導を進めていかなければいけないという、そういうフローチャートを作るっていうのを一生懸命やって、それを作るためには、子供の分かり方っていうか、誤答分析を一生懸命やったんですよ。 どういうふうに分かるのかっていうことと、どういうふうに分からないのかっていうことを、一生懸命その頃考えてたんです。 こういう分からなさって子供はあるよねっていう気持ちで読ませていただきました。 この前の大小の自主公開のとき、私は4年生の授業にずっと参加させていただきました。とても素晴らしい子供たちでね。3人グループの話し合いの中で、問題を解決していくっていうふうなことをやって、やり取りが、すごい

一 盃 森 委 員

レベルが高いなというふうに思っていました。
ただ、私がざっと見た感じで、クラスの中で2人くらいは、最初から最後まで置いてかれていっているじゃないかなって思っていました。
何をどうすればいいか分からない。そういう子供がいたとして、そのときに先生はどういうふうに子供たちに関わっていらっしゃるのかなって思った。
研究会の中で話題になれば、もっともっと深まっていくんではないかなっていうふうに思いましたしね。
だから、もう少し練度っていうんですかね。ああいう対応的な学習の進め方、その中で子供たちが深く学んでいくっていうふうなことを実現するためには、もう少しやっぱり時間をかけてじっくり取り組まなければいけないと思いました。
結局は、「主体的で対話的で深い学び」っていう、180度転換されたっていうふうな感じのことを何回も言ったんだけど、30年も40年も前にやったことの上に成り立っている。
授業作りの基礎的なこと、基本的なことっていうのはやっぱり変わらない。子供同士のやり取りの中で、どうやって拾い上げていって、その課題問題の解決を図っていくのかっていうふうな、基本的なことは変わらない。やっぱりそうなんですよね。あまりなんだかんだって振り回されしないで、じっくりとね、基礎的なことを基本的なことを先生方がぜひ身に付けてっていただければなって思う。
そういう意味で北先生の書いてた評価の現状というのは、これって当たり前の話じゃないのかって思う。やはり学校現場ってこんな感じなんではないかなという思いをしました。

鈴 木 教 育 長

やはり対話的な学びがしっかり根付いてですね、子供同士の学び合いとか、助け合いがちゃんと整理してる学級であれば、私は不登校はでないと思います。だからそういう本当に成立している学級を目指してですね、これからやはり取り組んでいかなくちゃならないと思いますね。

林 委 員

私も大河原公開研究会の話を一つしたいと思っていましたけれども、それに関わって、資料の6番のICTの活用、タブレット端末の活用と成果に絡めてなんですけれども、ここ数年で、子供たちはもちろん、先生方のタブレット活用の力がすごい伸びているなと思いました。
1年目に関わっていましたので、1年目の授業の様子と比較できたんですね。公開研究会の分科会で、適用問題がどれくらい解けていたかというのは、何%の子ができてましたとか、あとは振り返りでこういうふうなことを述べてい

て、そういうそれが何%とかって、数値ですぐに出てくるような使い方が日常化されてきているというのが、すごく驚きもあり、嬉しさもあって、そうやって日常的にどんどん先生方も使うし、子供たちも使うような授業改善ができてきているんだなっていうふうに感心させられました。

子供の様子を効率よく把握して、検討できるっていうふうな ICT の利活用ができていたのであれば、そこで何%の子ができましたで終わらないで、そのできなかった子の間違うところに、先生が今度は自分の肉眼で寄り添う。

肉眼で寄り添って、その本当に 45 分一緒に勉強してきたのに、その最後で分からないというその辛さに先生方が寄り添って、分からない子の代わりに、次の時間とかに先生が要所のところを、自分がその間違っただ身になって誤答を示したりしながら、その子に解決の糸口を少しずつ見つけさせてあげられるような活用の仕方が今後望まれるなどと思ったんです。

このできなかった子は自分が何とかして救わなきゃいけない、その救わなきゃいけない子の間違いに寄り添って、自分が代わりに間違っただけの感じで授業をしてあげれば、その子は救われますし、単元の中で要所要所でまた出てくるわけですね。同じようなつまづき箇所が。そうするとそこに寄り添ってあげられるような先生方が、いると信じていますし、本当の利活用ってそこだと思うんですね。

なので、そういうふうなことをすごく望みましたし、先生方自身もつまづくっていうことの経験を持って、その先生方みんなで、その授業の事後検討会などで、この子の困り感に共有して、先生方がみんな考えてあげたいねっていうような考えになってるといいなと思いながらあとにしました。

丹 羽 委 員 分からない子が分かるように指導できるのは最高のことですけれども、分からない子にとっては、そのことで余計目立ってしまうのは、辛いものがあるので、その辺のところは先生の手腕がものすごく問われるところですね。

一 盃 森 委 員 お話の中で出てくる事例は、先生が問いかけたことに対して子供は一生懸命やっているんですね。だから自分がやれることを表現しているわけですね。

でも、そこまでしかできないよっていう話なわけで、分かる分からないじゃなくて。

先生がこうしろって言っているから、何とかそれに応えなきゃいけない、書いて出さなきゃいけないって、子供ってそうなんだよねって。先生が言っているんだからそれに応えなきゃいけないって一生懸命なんだよね。

だから、それに対して先生がどう寄り添うってお話が出たわけですけど、だ

丹 羽 委 員

からどう返してあげれるのかっていうのを問われてることですよね。

先生方は子供、生徒を愛し、愛しなさいっていうか、そういったところが大事なんじゃないかな。やっぱりできない子はできないわけです。
その場合、その子の良いところを伸ばしてあげられるような、そういう優しい目を持ってもらいたいなと思います。

(2) 各課長報告

教育総務課長、生涯学習課長

令和6年度行事予定について説明。

8 次回教育委員会の開催日程について

鈴木教育長 | 次回の定例教育委員会は令和7年3月24日(月)午前10時から開催する。

11 閉会宣言 午後5時15分

令和7年3月24日

署名委員

署名委員